

と思ふようになる、色の細微な關係や調子を丁寧に寫生しようとすれば、小なる畫面では到底不適當なもので、之れは前にも述べた通り、不難な樂なスケッチをしようと思ふのならばそれ迄だが、困難を耐忍して研究して見ようと思ふ諸君は、一つ奮發して、四ツ切り、進んでは半切大をも畫いて見ては如何です

○終りに臨んで、以上お談したことは、只僕が經驗した處であるが、諸君は餘り之れに拘泥しない方が好い、一體畫を習ふに、理屈は極禁物で、畫法とか畫論とかを聞いて、偕て之れを實地に應用して見ようとする中々の困難だ、手が動かない、其聞いた規則通りにかゝないと正當でないかのよう思はれる、之れは銘々固有の發達に有害なるので、僕も自分に此經驗が有つたので、人から入智惠の畫法などは一切放棄し、自分は自分の考で研究したときも有る、寫生には、まづ空から初めて、次ぎに遠景をかけと教へられた處で、自分にそれが都合が悪ければ、別に方法を勝手に定めて少しも悪くない譯であるから、以上のお談も、反つて諸君の疑惑を來しては本意でないゆゑ、只御參考旁々、諸君のスケッチの研究に對する僕の希望を聊か開陳した位の處で逃げて置きませう。

## 花の水彩

〔三〕

丸山 晚霞

### 日本の花と歐米の花

吾は花を好尚する性情に富み、至る處に於てその美醜を問はず、花とし視れば大に注目するので先に斯道研究の爲め、歐米の大陸を漫遊せしときなどは、行く先々の花園、又は花室に入りて、培養の力にて咲けるものを觀察し、野外散歩のおり等は野生花に注意し、歸途は南洋各地に咲ける花の種類を究めて歸朝した。而して吾が帝國の花と、歐米各國さては南洋の花とを比較して見ると大に異つておる。それは風土や其の他の關係からである。花の種類は日本に多く、その花の麗はしく高尚で、瀟洒淡泊なるは水彩畫を見る様で、日本人の性情も花の感化をうけたのは決して尠くない。日本に一と度漫遊せし外客は、何れも日本の花を賞

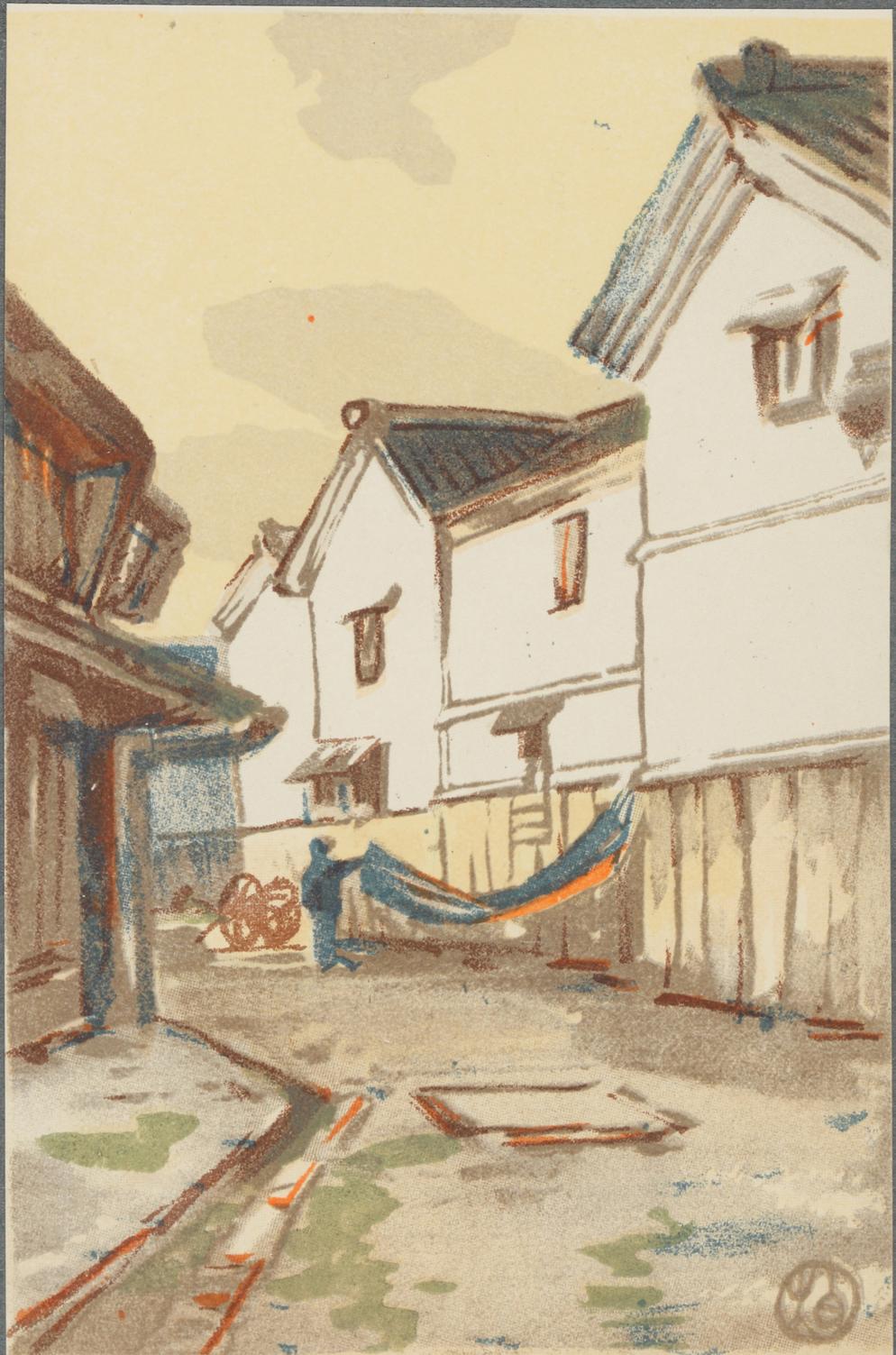
揚して、美園國とまで嘆賞するので、それは至て眞面目なる賞讃の語である。

歐米を通じて野生の花は至て尠い、多くは一度人の培養により、天工を失して人間化した花である。世紀を重ねた文化は園藝術を進歩爲さしめ、花樹花草の培養は實に驚くの外はない、恰も兵卒が將校の命ずるまゝに働くかの如く、園丁の命ずるまゝに咲くのである。米歐にありて吾が觀察の一二を擧ぐれば、或る年の冬、北米の費府に滞留せしことあり。北米の嚴寒は激烈にして、吾國人の想像もつかぬ程である、吹雪窓を打つの日、費府の公園に至りて植物館を參觀した。巨大なる館は厚きガラスにて構造せしもの、これに入れば内部を區別して、熱帶温帶となし、熱帶部には椰子、竹、芭蕉、蕁鬱として叢生し、清澄泉は綠翠の間を出て、小河となり、河畔の雜草新綠滴り、奇しき花は芳香を放ち、身は閑雅なる南洋の一區にあるの感が起つた。その館を出づれば、温帶寒區にして、日本の花樹花草も培養され、躑躅、牡丹、燕子花、は百花と色彩を競ひつゝ、咲き亂れてあつた。花を好愛する吾は、只美と奇とを叫びて、この境を去るに忍びなかつた。其の他歐米は至る處四季を通じて、家室及び園林庭池に花の斷える事がない。殊に英人は花を愛し、英の田舎にありては、花を以て住家を包めるものを視た。英人は園藝術に長じて、庭園を作るにも自然に近づけ、花にて掩はれし家も自然の如く見せ、色の調和もよく、如何にも麗美で、吾はかゝる家の前を過ぐることに、何時もしばし見とれて、花の中なる家庭も、花の如く美しく温かである事も想像した。其の他南歐北歐何れも培養の花のみ多く、野生花は至て尠い。瑞西の山間には、野生花の美はしきを視しも、日本の野を彩する如き花には遠く及ばず。南洋は花殊に多し、何れも形大にして、紅赤紫のものにて濃艶である。總て日本の淡麗には及ばぬのである。以上は歐米の花の概略である。日本の花は先づ國花として櫻花を第一位とす。殊に高潔なる梅又は菊の如きは、東洋特殊の花として、歐米にありて見る事が出来ない。日本の花として世界に秀で、讚嘆さるゝのは、園林庭池を彩する培養の花にあらず、吾が帝國を美しく纏ふ衣ともいふ可き野生の花である。野生の花は天工なり、天彩なり、天の美、之れ以上の美はあるまい。凡て天工の花は一重咲きにして、培養にて變化したる人



揚して、美國國とまで嘆賞するので、それは至て眞面目なる賞讃の語である。

歐米を通じて野生の花は至て夥い、多くは一度人の培養により、天工を失して人間化した花である。世紀を重ねた文化は園藝術を進步爲さしめ、花樹花草の培養は實に驚くの外はない、恰も兵卒が將校の命ずるまゝに働くかの如く、園丁の命ずるまゝに咲くのである。米歐にありて吾が觀察の一二を擧ぐれば、或る年の冬、北米の費府に滯留せしことあり。北米の嚴寒は激烈にして、吾國人の想像もつかぬ程である、吹雪窓を打つの日、費府の公園に至りて植物館を參觀した。巨大なる館は厚きガラスにて構造せしもの、これに入れば内部を區別して、熱帶溫帶となし、熱帶部には椰子、竹、芭蕉、蕪鬱として、叢生し、清澄泉は綠翠の間を出て、小河となり、河畔の雜草新綠滴り、奇しき花は芳香を放ち、身は閑雅なる南洋の一區にあるの感が起つた。その館を出づれば、溫帶寒區にして、日本の花樹花草も培養され、躑躅、牡丹、燕子花、は百花と色彩を競ひつゝ、咲き亂れてあつた。花を好愛する吾は、只美と奇とを叫びて、この境を去るに忍びなかつた。其の他歐米は至る處四季を通じて、家室及び園林庭池に花の斷える事がない。殊に英人は花を愛し、英の田舎にありては、花を以て住家を包めるものを視た。英人は園藝術に長じて、庭園を作るにも自然に近づけ、花にて掩はれし家も自然の如く見せ、色の調和もよく、如何にも麗美で、吾はかゝる家の前を過ぐるごとに、何時もしばし見とれて、花の中なる家庭も、花の如く美しく温かである事も想像した。其の他南歐北歐何れも培養の花のみ多く、野生花は至て夥い。瑞西の山間には、野生花の美はしきを視しも、日本の野を彩する如き花には遠く及ばず。南洋は花殊に多し、何れも形大にして、紅赤紫のものにて濃艶である。總て日本の淡麗には及ばぬのである。以上は歐米の花の概略である。日本の花は先づ國花として櫻花を第一位とす。殊に高潔なる梅又は菊の如きは、東洋特殊の花として、歐米にありて見る事が出来ない。日本の花として世界に秀てゝ讚嘆さるゝのは、園林庭池を彩する培養の花にあらず、吾が帝國を美しく纏ふ衣ともいふ可き野生の花である。野生の花は天工なり、天彩なり、天の美、之れ以上の美はあるまい。凡て天工の花は一重咲きにして、培養にて變化したる人





工の花は八重咲きである。八重の花を嘆賞するは、未だ花の美を知らざるものである。

#### 花の色

宇宙間の色彩にて、花の如く麗美なる色は他にあるまいと思ふ。而して花の色は種類至て多く、之れを微細に區別すれば、百千を以て數ふるであらふ。今これを大別して、白、黄、赭黄、紅、赤、青紫、の七種と爲す。

#### 四季の花色

吾は科學者にあらずれば、一々理を説明する事は出來ない。只自分が花を見て感じ、それを畫く上より觀察したる經驗を述ぶるのである。吾が實地の經驗によると、冬の終りから早春にかけて咲く花には、黄、と白、が割合に多いのである。氣候其の他の關係であらふ。氣候の寒い頃は、草木は皆枯れて、自然界の色は赭黄色、黄色、白色の如く淡白であるから、黄白の花は自然の保護色ではあるまいか。これ等の花が霜枯れた野に咲て居ると、色の調和もよく至つて高尚な感が起る。黄白の花の一二を擧ぐれば、晩冬の頃より水仙、茶、枇杷、寒菊、金剛纂<sup>グダ</sup>、柊、蠟<sup>ロウ</sup>、燐<sup>リン</sup>、など、早春よりは福壽草、雪割草、梅<sup>ウヅメ</sup>、迎春花、蒲公英、の如く、いづれも黄色と白色である。孟夏の候ても、氣候の寒い深山や高嶺に登ると、割合に白と黄の花が多く咲いてゐる。紫色又は紅色に咲く堇、釣船草、の如きも、寒い山に這入ると、これが白に咲き、黄に咲くのである。信州輕井澤の高原には、一面に白の堇が咲き、白馬山の頂巔には、黄の堇、黄花石楠、がある。陽氣漸く發する二三月頃の氣候となると、紅色が漸々深くなり、赤色も加はり、梅、桃、椿、等が咲き、葉櫻の晩春頃より、紫色の藤が始まり、初夏になると濃厚なる色紫、紅、赤、が多くなり、燕子花、牡丹、菖蒲、芍藥、杜鵑花、等が咲き、深緑の候となると、色は倍々濃厚を加へ、百合、蓮、薔薇、百日紅、安石榴、白桐、牽牛、など開らき、殘暑の頃は山野一帶、千紫万紅ともいふ可き草花を以て充たされ、秋の七草とて歌に詩に畫に、風懷の高士に愛さるゝこの候が野花の盛時である。秋風一と度吹けば、これ等の濃厚なる色彩は色あせて、純潔なる白萩、しほらしき女郎花等咲残り、それよりは野も山も錦と見まごふ霜葉となり、これ等が落葉すると、赭黄色なる霜枯の野に、黄白の野菊が殘るのである。